

戦争を知らない
世代へ⑬ 愛知編

豊川の熱い日 8・7空襲の記録

戦争を知らない世代へ ①⑥ 愛知編

豊川の熱い日

—8・7空襲の記録—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑩

豊川の熱い日—— 8・7 空襲の記録

昭和51年 4月11日 初版第1刷発行

編 者 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社
郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

印刷所 凸版印刷株式会社

発刊の辞

愛知県豊川市の海軍工廠は、当時五万人とも六万人ともいわれる人員を数え、東洋一の設備を誇っていた。その海軍工廠が、一瞬にして数千の死傷者を出す爆撃を受けた豊川空襲の記録は、あまり知られていない。

広島、長崎のあの原爆投下に多くの人の目や耳は奪われ、その中間に起った豊川の惨劇はクローズアップされずにきたためであろうか。

しかし、私たちの郷土に散った花の若武者たちは、早稲田大学専門部、日大予科、立命館大学専門部をはじめ、愛知、静岡県内の各中学校、実業校、女学校の生徒や、さらに豊川市内の国民学校の児童までが加わって、ほとんどが十代の青少年だった。

ともすれば人々の記憶から忘れ去られてしまうかも知れない昭和二十年八月七日の事実を「先人の苦闘を忘れるな」と訴えることは、反戦平和を願う私たちの役目ではないかと感じて、出版の準備にとりかかったのである。

戦争を知らない世代の私たちが「戦争がこれほどまでに悲惨なものなのか」と実感して認識できたのも、一人ひとりの生の体験を聞くために困難な取材に努力した故であろうか。

今回、こうした平和を希求するささやかな輪が、市民の協力を得、ここに一冊の本として発刊の運びとなったことは喜びにたえない。編集の労にたずさわった「愛知県反戦出版委員会」「創価学会豊川市青年部」のメンバーに心から敬意を表するものである。

昭和五十一年四月

創価学会青年部

愛知県男子部長 池田昌義

目

次

発刊の辞

序章 豊川海軍工廠の足跡

豊川海軍工廠の歴史	山脇保之	10
豊川海軍工廠の機構	飯野善孝	15
思い出の豊川海軍工廠	伊藤邦雄	18
当時の豊川工廠	前島松一	23
昭和十二年からの思い出	榊原芳一	27
工廠総務部での私の仕事	佐々木五郎	31
悪夢の死体調査	清川善太郎	35
亡き友の思い出	川上 愿	38

第一章 若き学徒と八月七日

蟬の啼かない朝	小椋昭英	44
豊川、十七日間の思い出	原田和雄	50
爆弾に追われて	中村健一	54
花火に思い出す空襲の頃	若林りさ	56
亡き友、太郎左エ門君を偲びて	粟生 博	59

もう少し早く避難すれば.....夏目敏雄 61

何もわからず働いて.....安形花子 65

散ったわが友.....鈴木美保子 68

第二章 豊川の熱い日

殺されていった人々.....堀江 昇 74

それでも信じた戦争の勝利.....青野保治 78

防空壕に生理めとなって.....八木力太郎 82

惨めな工廠生活.....匿名 86

第二の広島——我が町豊川.....中村米次郎 88

鳥肌の立つあの日の思い出.....嶋田鶴吉 93

掘り出された犠牲者.....吉野政夫 96

惨禍は青葉と共に.....小林きぬ 99

西へ西へと逃げるだけ.....桑原とみ 106

第五砲台と私.....伊藤泰蔵 109

爆弾の下を避難して.....鎗水守太郎 113

二度と戦争はご免だ.....池田英男 116

戦争は悲惨でしかないノ……………細野盛雄 119

辛かった工廠勤務……………中村ツギ子 122

戦死者に後髪を引かれて……………高橋 正 124

一ヶ月前に豊川を離れて……………須藤彦蔵 126

仕事で感じた戦況の不利……………平井 正 128

無惨な光景に知る戦争の恐怖……………鈴木 かつ 130

指の間に見た工廠の最期……………亀谷栄一 132

頭痛を覚えた遺体収容……………井川末治 135

茶毘の煙は絶えることなく……………鎌倉 寿 137

忘れじの遺体収容……………穂積 肇 140

第二の誕生日、八月七日……………鈴木辰男 143

第三章 工廠のかたわらに生きて

三河八幡郵便局のことなど……………宮道佐一 148

息子よ静かに眠れ……………野口秋雄 152

戦場のような豊川……………寺部 錠 156

食堂に工員の影うせて……………中林ふじえ 159

共済病院からの脱出……………本多みさを

夫の死を無にしないでノ……………松下きし

娘はどこへ行った……………竹内末吉

帰らなかった甥……………山崎ますみ

豊川の赤い夜空……………田中はる

不安にすごした日々……………小林ちえ

夫を奪った空襲……………大西とせ

戦争は絶対イヤ……………伊藤とし

第四章 悲歌、女子挺身隊

近づく夏に思い出す八月七日……………中沢とみゑ

帰郷命令中に迎えた終戦……………稲垣春子

四年の後に散った工廠……………堀江艶子

嵐の前の静けさ……………榎本かなよ

死の恐怖……………白井志げ子

消えた海軍工廠……………浅見ヒサ子

生と死のはざまに鬼となって……………加藤迪子

大地は地震のように……………	小林まち
ブルブル震えがとまらない……………	内藤より
年少工の手を引いて……………	白峰月江
あの時逃げ出してよかった……………	足立久枝
肩を抱き合い励ましながら……………	井川君代
忘れぬ生の実感……………	萩野とみ子
帰らざる妹……………	菅沼恵美子
九死に一生をえて……………	岩瀬初日
弾丸作りの毎日……………	大脇松子
あとがき……………	

234 230 227 223 221 218 216 213 211

序章 豊川海軍工廠の足跡

豊川海軍工廠の歴史

山脇保之（50歳）

当時、工廠の指揮
兵器部に勤務

北に三河富士の別名で知られる本宮山の秀峰を仰ぎ、南に豊川稲荷の名で普く知られた円福山妙厳寺のいらかを望む本野ヶ原——朝な夕なに妙厳寺の鐘の音が響きわたっていた。周囲は見渡すかぎりの桑園、その桑畑の果てるところは平坦な松林と芒の生い茂る原野が続き、四季おりおりの野花と禽鳥の声が絶えなかった。その昔、この付近一帯を「穂の原」と呼び、そこから「本野ヶ原」の名称は生まれたのである。

その本野ヶ原の一角に五十数戸の静かなたたずまいを見せている「本野部落」と呼ばれた部落があった。昭和十三年七月、この温和な部落に降って湧いたが如き一大事件が発生したのである。海軍の軍需工場の建設がそれであった。東西南北それぞれ一キロ有余、総面積二百万平方メートルに及ぶ広大な敷地を買収して、東洋一の規模と設備を有する海軍兵器の製造工場をこの地に建設するというのである。蜂の巣をつついたような大変な騒ぎで平和な小部落は沸き返った。幸い、

敷地予定内に入る住居はなかったのであるが、山林や畑などは次々と買収され、部落の人々は下宿屋、貸屋へ転業し、中年・若年の者達は建設後の工場に奉職するため、呉や横須賀の海軍工廠へ技術取得の目的から就職して行った。

後に豊川海軍工廠と呼ばれることになるこの兵器工場は、こうして翌年の昭和十四年三月より建設工事が開始されたのである。まず横須賀海軍建設部が、多くの囚人を使用して周囲に大きな溝と土堤を築造することに手をつけた。火の見やぐらのように高くそびえる監視所からは、看手がピストルを構えて見張るといふもののしきであった。そして、この建設委員長には神保海軍大佐（後に少将）、以下三十数名の委員が任命されていた。

工事は順調に進んだ。豊川（川の名称）から砂利を運ぶために、辻々には交通整理員が立ってトラックを優先的に通行させた。砂利トラは列をなして砂塵をたてながらノンストップの猛スピードで走りまくっていた。北の山麓へは復線の鉄道が敷設され、道路には遮断機がつけられ踏切番が立った。土を満載した十数台のガソリンカーは休む間もなくピストン輸送を繰り返し、みるみるうちに高い大きな山が広大な平地へと変っていったのである。豊橋からは牛久保町を突切って工廠正門までに、幅二十数メートルという、当時としては相当に広い道路が開通した。

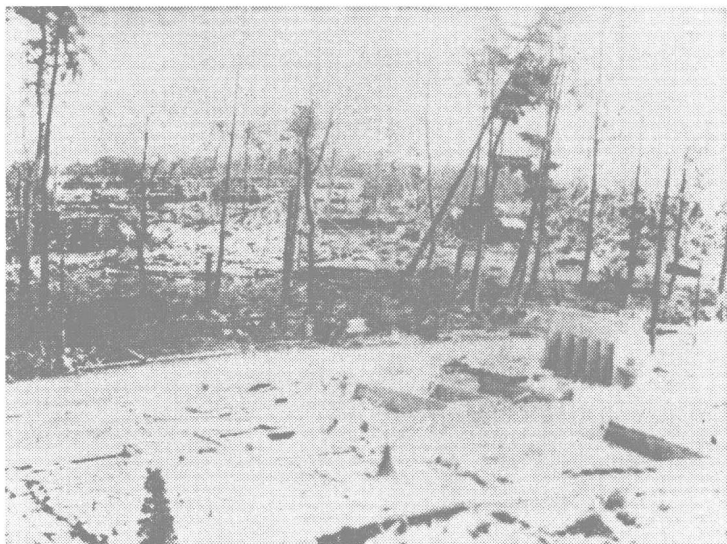
芒が茂り野花が咲き乱れて野兎が走り回り、栗や葎などの山の幸に恵まれて野狐が出没した本野ヶ原は、一ケ年を経ずして煙突が林立する大工場街に変貌を遂げたのである。そして、昭和十

四年十二月十五日開庁式が挙行された。「豊川海軍工廠」の初代工廠長には建設委員長の神保少将が任命された。海軍軍樂隊が豊川の街頭を演奏行進し、牛久保小学校とか豊橋市公会堂では演奏会が催され、町には祝賀気分が至る所に溢れたのである。この華やいだ豊川の町が五年半の後には決定的に潰滅し去る運命にあることを、この時いったい誰が予想しえたであろうか。

開庁時の従業員数は約千五百名、事業部門は機銃部と火工部の二部門で発足した。廠内は基盤の目のように区画され、広い道路が東西南北に走る中を各工場の建物が整然と立ち並んだ。そして、戦争の拡大につれ各部の建物や設備が最初からの計画に従って付加、増強されていった。

更に昭和十六年、工廠東側に五十万平方メートルの拡張が立案された。ところがこの計画によれば、本野部落の九五パーセントは買収されて、わずかに家屋敷とその周辺の一部が残るのみという事態が生じることになり、部落はまたまた大混乱となった。

時は既に太平洋戦争突入寸前の戦時体制下にあった。それにもかかわらず、部落の代表者は海軍省や管制本部へ計画反対の直訴を試みた。しかし、彼らへの圧力は実に大きく、代表者達が東京へ向けてどれほど内密のうちに出発しようとも、各駅や要所要所には必ず憲兵隊の鋭い目が光り、上京を中断させようとしたのである。そうした警戒網を首尾よく煙に巻いて上京できたとしても、豊川に帰ってから今度は憲兵隊につけ回される有様であった。厳格な統制が日を追って激しくなる一方であった昭和十六年の当時としては、考えられないような思い切った行動をしたも



東洋一を誇った海軍工廠も瞬時に焦土と化した（三河資料館提供）

のである。本野部落の住民にとっては、住み慣れた屋敷や土地を追われることは、命を奪われるに等しきことだったのである。

部落民のそうした悲願は、しかしながら国家権力によって無残にも打ち砕かれた。豊川小学校の一室に集められた部落の人々は、便所へ行く時にも憲兵隊がつきまとう監禁状態の中、強制買収に力づくで調印させられたのである。そして、家屋敷が買収地内に入った人達は、新しい郷土を求めて寂しく本野部落を離散していった。

この直後、神保工廠長は更迭された。おそらくは住民統制が不徹底ということへの責任を問われたのであろう。そして、二代目工廠長として相馬六郎少将が着任したのである。

このような経緯を経て、昭和十七年四月には工廠の東部地区に光学部が開設された。更に十八年の九月には指揮兵器の開設というふうには、工廠の規模は以後拡大の一途を辿ったのである。それに伴い従業員も年々増大した。昭和十六年からは国民徴用令により各地から徴用工員が入廠、次いで十八年からは女子挺身隊の入廠をみるに至ったのである。こうして、農業中心ののどかな町や村には、せわしく行き交う工員の姿が激増し、最盛時においてその数は五万六千名にもなったのである。工廠周辺には下請会社の事務所や、商店、下宿屋が軒を並べ、豊川の地図は日ごと塗りかえられていった。

しかし、その地図の塗りかえ作業の終る日が来た。昭和二十年八月七日、豊川は幾千幾万もの人達の流血によって赤々と染めぬかれたのである。